

新書紹介

まちづくりの読本

延藤安弘 著

晶文社 A5判 一三三頁 一、九三〇円

「自分たちの住む町は、自分たちの手でつくりたい」、そう考えて立ち上がった住民たち。そしてそれを支える自治体や専門家たち。本書は著者が実際に全国各地を訪問して体験した一九の町（海外二都市を含む）のユニークな「まちづくり活動」を紹介した本だ。著者は、まえがきで自分たちの手でつくるまちづくりの意義をして次の三つをあげている。一つめは身近な環境づくりからまちづくりを進めていくことが、広域的な都市計画とどのように整合するのかが住民が理解することが可能になること。二つめは、地域住民の生き方を充実させること。三つめは、住民参加のまちづくりは、人と人との関係に頼るため「遊び心」をたえまなく発揮できる

こと。このような視点から現代のまちづくりが私たちに発信しているメッセージを聞きとろうと試みたのが、この本の内容だ。第一部では、「心はずむまちづくり」と題して公害に悩む町の再生、権利関係の錯綜する市街地での共同建替え、古い公共住宅の改善、山村での地域おこしの拠点としての公営住宅づくりなどのケースがとりあげられている。

第一部では、まちなかに自然をよみがえらせる試みを紹介している。市街地のなかでの農場づくり、市民参加によって広大な森をつくる計画、身近な環境のなかに水や土や緑をとりもどす取り組み、住宅地のなかの公園に野生的な冒険遊び場をつくる活動などをとりあげている。

第三部では「想像力をはぐくむまちづくり」と題して人工的な環境のなかでも、星や樹木や火と親しむことができる住宅づくり、また音楽などを住民が共同で楽しむことができるコミュニティづくりなどが紹介されている。本書に出てくるまちづくり活動は、著者のまちづくりは愉しみながら行うものという考え方に合った事例が多く、仕掛方にいろいろな工夫が試みられている。例えば福岡市の千代町という町は、人口の減少が著しく、まちの活性化が課題になっていったが、まちづくり構想を「パピヨンプラン（蝶の計画）」と名づけて蝶が羽根をひろげている将来イメージで、地区住民に説明したところ大きな反応があった。熊本市川尻町での川でペーロン競争をきっかけにしたふるさと意識のほりおこし、オランダ、ヘルモンド市、熊本県鏡町での「まちづくり絵本」の制作を通しての郷土の見直しの話などが紹介されている。最近、横浜市でもいろいろななかたちの市民参加によるまちづくりが試み

られている。公園や子どもログハウスづくりに、地元の子供達を書いた絵のアイデアをとりいれたり、女性の目からみた街づくりの提案募集を行ったりしているが、三百二十万都市横浜では、なかなかきめ細かな市民参加のまちづくりができていないのが実情である。しかし本書の中で書かれている事例は、いずれも楽しみながらも住民のまちづくりに対するコンセプトがしっかりしている点で今後の横浜の市民活動を進めていくうえで参考になるのではないかと考える。また行政側の役割は何なのかという課題に対しても示唆に富んだ内容となっている。なかでも大牟田市の水道局職員が「蛇口の向こうにまちづくりが見える」というキャッチフレーズで、家庭排水から地域での水辺環境を考えていこうという話は、行政のかかわり方についての非常によい例ではないかと思う。家庭排水という身近な生活環境への関心をまちづくりのスタートにし、職員の自己研修のなかからでてきた「ホテル探偵団」の企画を通じて住民間のコミュニケー